

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どものイマジネーションの発動性：身近にある神秘的な場所に注目し、ふるさとの心を語る
Author(s)	佐藤, 憲朗 [他]
Citation	児童の言語生態研究, 16 : 96 - 105
Issue Date	2004-02-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045196
Right	
Relation	



子どものイマジネーションの発動性

—— 身近にある神秘的な場所に注目し、

ふるさとの心を語る ——

■教材『善太と三平』 坪田譲治

佐藤 憲 朗 他

一、日時

平成十四年八月二十一日（水）
午後二時～二時四十五分

二、児童

岩手県大東町立内野小学校 三・四年
佐藤憲朗学級 男二名 女二名 計四名

三、領域

感情

四、授業テーマ

イマジネーションの発動性
身近にある神秘的な場所に注目し、ふるさとを語る
—— 善太と三平を使って ——

五、テーマ設定の理由

私たちは人間が成長していくにあたって家や地域の

伝承体として何をどう受け継いでいるのかを問題にしてきた。現在研究を進めているイマジネーションの時間性・空間性の問題も単に個人が自由自在に何を連想するのかというのではなく、イメージの動き方そのものを、無意識に伝承されてきている部分があることに主眼を置いて行ってきた。

地域の担い手として子どもをとらえた場合も、単に地域の伝統や文化を知識として伝達するだけでは不十分である。古来から先祖たちが大切にしてきた「ふるさとの心」と呼べるようなものが伝わってはじめて次の世代に受け継がれたと言えよう。我々はその心の獲得過程そのものが子どものイマジネーションの中に見て取れると考えているのである。

そうした観点から子どもたちの成長を追っていくと中学年の頃に大きな転機を迎えることがうきほりになってきた。低学年までと違い、自分の中に自然に湧き上がるイマジネーションに素直に従えない子どもが増えてくるのである。それによって、地域に伝承され

てきた事を、特にそれが神秘的であったり非現実的であったりすればするほど受け入れようとしなくなる。その背景には現実的思考の発達や非現実を排除しようとする現代の風潮などが考えられるが、そのことは逆に「ふるさとの心」を素直に受け入れ続けようとするような子どもが引け目を感じてしまうような状況を引き起こす。

また仮にその地域の中で生活しているうちはそうした心を捨てずに成長していくとしても、大きくなって他地域で暮らすようになった時に、自分の生まれ育った地域が時代遅れであったのかというような引け目を抱いてしまうこともある。

しかしどんなに科学が発達した世の中になろうと、我々の中には先人たちと同じ感覚が受け継がれている。だからこそ大人であっても我々にはそこに足を踏み入れたとたん何か特別な感情に襲われるとか異様な体感を生じる場所・空間がある。

善太と三平にもそのような場所があった。田んぼの

六、指導計画 三時間

一時間目(本時)

片すみの太い松の木が空高くそびえた、根元に小さな祠がある空間だった。善太はその高い枝に留まった白い鳥が行者のように見えたし、神秘的で、恐ろしいものにさえ感じた。言い換えればそこでは時空が、転換・反転するからである。三平は、そこで出会ったおろぎに手を合わせ拝んだ。このおろぎが特別大きかったり美しかったりしたからではない。坪田譲治は三平に「これが神様かもしれない」と言わせている。

私たちの先祖は、それが人であれ、動植物であれ、自然現象であれ、ともかくそのものが、私たちにとって「畏(かしこ)まきもの」、すなわち身の毛もよだつ異様なものとして出会えば、それをカミとして受け止めてきた。これは「身の毛もよだつ」という体感に従い、「恐ろしい」という感情にリードされて、山を見、川を見、動植物を見ているということである。ただしそれは、気が付いてみれば一瞬のことなのである。一瞬ではあるが、明瞭に見えるし濃密な別空間として出現するのである。これを私たちは、時間空間を転換するイメージーションと考えている。このイメージーションの習慣化がいわゆる見立てである。

今日の授業では、まずこの見立てを課題としたい。三平がおろぎに手を合わせるのと同じようにこの子どもたちも手を合わせるのかどうか見届けたい。

次に、この豊かな自然に包まれて生活している子どもたちに、それぞれの神秘の場所、不思議な空間を話してもらいたい、その体感、感情がそれぞれにあることを確認しあいたい。

その自覚が子どもたちが地域の担い手としてしっかりと生きていく力のもとになると考えるからである。

- 善太と三平を読みながらイメージーションの発動性を確かめる。
- 自分の生活空間からイメージーションが発動しやすい場所について語る。

二時間目

- 一時間目の授業で確かめられたひとりひとりの体感を集約することによりふるさとへの心を知る。

三時間目

- 身近な自然や文化財に注目しながらそこに流れているふるさとへの心を語り合う。

七、本時の目標

- 善太と三平を読みながらイメージーションの発動性を確かめる。
- 自分の生活空間からイメージーションが発動しやすい場所について語る。

八、本時の展開

学習活動	学習への支援 ※観察の視点
一、学習のねらいを知る ● これから善太と三平のお話を読みます。みんなはそのお話を聞いて二人の心中を考えてください。	● 善太と三平を読みながら、ひとりひとりのイメージーションが発動するように支援する。
二、善太と三平(1)を聞く。	● ゆっくり語りかけるように読み進める。 ● 子どもたちの発言を

- 善太はどこにいたのか。
- 善太は何を聞いたのか。
- 善太は何をしたのか。
- 善太はなんでそんなことをしたのか。
- へんな声って何の声だったのかな。
- 白い鳥は死んだのか。
- どうして殺さなかったのか。

板書する。

(板書①)

善太の話
どこに↓田んぼのかたすみの大きな松の木の下。(神秘的)
善太はへんな声を聞いた。
善太は白い鳥に石を投げた。
白い鳥は死んだのか
↓死なない
↓どうして殺さなかった
↓神様の手下だから、たたられるから

- 三、善太と三平(2)を聞く。
● 三平はどこにいたのか。
- 四、善太と三平(3)を聞く。
● 三平は何をしたのか。

(板書②)

三平の話

- 五、善太と三平(4)を聞く。
● 三平の耳には何が聞こえてきたのかな。
 - 六、善太と三平(5)を聞く。
● 三平の思ったことは何かな。
- どこに↓田んぼのかたすみの大きな松の木の下にあるほこらの前。(神秘的)
三平はほこらのまわりを回った。
石を投げた。
耳をすました三平はへんな声を聞いた。

七、善太と三平(6)を聞く。
●これで善太と三平のお話はおしまいです。

八、自分の生活空間から、イマジネーションの発動しやすい場所について語る。

●今度はみんなの話を聞かせてください。
●善太や三平が感じたような場所は、この近くにありますか。

●その場所になんか体感を感じたか、ひとりひとり話す。
(善太と三平の体感と比較する。)

九、学習のまとめと次時の予告

●次回はひとりひとりがこのような体感を感じる場所について、絵やことばで話す。

白い鳥の声
木の声
●神様かもしれない

本時の目標の二番目を確認する。

●身近な生活空間のなかにある神秘的な場所に注目する。

●自分なりの体感が語れるように支援する。

(板書③)

さとみ・たくや・かな
こ・なおとの話
●神秘的な場所
●高い木
●ぶつだん
●おほか
●ほこら

九、評価

○「善太と三平」を通じて神秘的な場所での体感を感じることができたか。

○ひとりひとりが、自分の体感を語ることができたか。

善太と三平

①

それはたんぼのかたすみで、ある太いまつの木が、空高くそびえていた。

ある日、その高い枝の上に、白い鳥は、とまっていた。白い鳥は、行者か何かを思わせて、神秘的な気

もするものである。はとくらしいもある白い鳥である。善太は、おそろしい気がした。

しかし、善太は、いったのである。
「あんなの、こわくないや。」

すると、声が聞こえた。
「こわくない?」

「こわくないとも。」

善太はそくぎに答え、そして耳をすました。
いざとあれば、けんかしなければならぬ。しかし、

それきり、声は聞こえない。それで、もう一度、いつてみた。

「ああ、こわくないとも! ちょっと、こわくないや。」

そして、また、耳をすましていた。やっぱり、声は聞こえなかった。すると、相手はどうしたのだろう。

もうにげたか。強くて、もう、からだにせまっている

のか。

「ええい、石、ぶつけてやれい。」

木から三、四間はなれて、善太は石をひろった。これをもって身がまえると、木の上を見あげて、それから周囲に気をくばった。が、やはり、なんの答えもなかった。そこで善太は、木から二、三歩のところまで

かけより、そのいきおいで、上に石を投げた。石がえだにあたって、落ちてくる音を聞きながら、かれは、

あとも見ずににげた。白い鳥は身じろぎもしないで、じっと、そのようすをながめていた。

善太は、勝ったような気もすれば、負けたような気もしたのである。しかし、家へ帰つてくると、三平に

いつて聞かせた。
「三平ちゃん、きょう、とても、たいへんだったんだ

ぜ。あそこのたんぼのまつの木のとこね、あそこに大きい白い鳥がいてね、クワァ、クワァクワァって、鳴

いてるんだ。とっても大きな鳥なんだぜ。たかぐらい、ううん、わしくらい。白い大わしだ。おれ、石をぶつ

つけてやった。」

「フーン。」

三平は、感心したのである。そして、しばらくして
いったのである。
「それで、どうした? 死んだ?」

「死なないや。」

「どうして殺さなかったの?」

「殺さないように、石ぶつつけたんじゃないか。あんな白い鳥なんか、神様の手下なんだぞ。殺したら、それこそたいへんだあ、たたられてしまうから。」

「フーン。」

② まつの木の下には、根もとに小さいほこらがあつた。かわらでできた、おもちゃのような形をしていた。片手でも、さげられるくらいのものである。何を祭つてあるのか、なが年そこになつていて、雨にうたれ、風にあふかれ、そして草の中になつていた。それでも、

一年のうちには何かの日には、善太たちのおかあさんが、そこにおまいりして、その前で、何かブツブツいいながら、火のついた線香をおそなえたのである。けむりがモウモウとなつて、まつの木の幹にそつて、上にのぼつた。ちゆうとで、幹のうらへまわりかけると、そこで、スツスツと風にふきちらされた。しかし、それを見ると、善太にも三平にも、何かものすこいことが思い出された。けむりというものは、

きみわるいものである。それがいつそ、このたんほのかたすみを、神秘的なものとした。

兄の善太は、白い鳥を見たというところだし、おかあさんは、線香を立てておがむところだし、三平も、何かふしぎなものを見るにちがいない。そう思つて、こわいところだけれども、ある日、三平は、そこにやつてきた。

③ 「ちよつとも、こわくないや。」
家を出るときから、かれは口に出して、いったのである。

「走つてやれい。」
そのし、ようこには、かれはこういつて、走りさえたのである。そうして、木の下へかけつくと、木の周囲をぐるりとまわつて、上から下まで見あげ、見おろしたのである。それから、ほこらの前に立つて、そ

のかわらの小さいお宮を、じつとながめた。なんにもない。鳥もいなければ、声も聞こえない。でも、もつとよく聞いてみなければ、また、もつとよく見てみなければ、何かがあるかもしれないぞ。

④ それで、三平は立つたまま、じつと耳をすましていた。

⑤ と、そうだ。チリ、チリ、チリ、虫の声が聞こえてきた。こおろぎの声である。声をたずねて見まわすと、これはほこらの中から聞こえている。そこでしゃがんで、からだをすくめてのぞきこむと小暗いかわらのお宮の中のかたすみに、こおろぎは、まぶたのない二つの目を開き、長いひげを前にさし出し、鳴くのをやめて、三平のほうをじつと見ている。ほこらの中は、かわらの土も、白くかわいている。

さて、このとき、三平は思つたのである。
⑥ 「これが、神様かもしれない。」

⑥ そこで三平は、そのこおろぎの前へ頭をさげた。しぜん目がつぶられ、しぜんに手があわされた。つきに目をあけてみたが、こおろぎは、やはり前のとおり、まぶたのない二つの目で、三平のほうをながめ、長いひげを前につき出していた。三平は、まんぞくして立ちあがり、ゆつくり家のほうへ歩いて来た。

※この授業のために、教材処理をした。
(善太と三平・坪田譲治童話集・文研出版)

<p>佐藤 ☆二時☆ 緊張するかもしれないけど素直な気持ちを言ってください。</p>	<p>中川 今日のお勉強の目的、目的ってわかるかな？ やりたいこと、みんなにお話を聞いてもらいます。それで聞いて思った事を言ってください。これが正しいかなとか間違ひとかは考えないでこれは間違ひってことはないんだからね。だから思っていること、質問されたことで多分こうだろうなと思つたこと、何でもいいからお話ししてください。</p> <p>小林 先ずお話を聞いてください。ではお話のお姉さんです。そう言わないと怒るかいいんだよ。先生も二回赤ちゃんを産んでいて二人とも女の子だけど、お姉さんというよりオバサンかな…</p> <p>中川 善太と三平というお話で、私が生んだのは女の子だったけど、男の子が二人出てきます。(本文1)</p> <p>全員 お話どうだった？ 何ていう話だった 善太と三平</p>
--	--

中川 すごいな、一回で覚えちゃって。善太と三平でどっちがたくさん出てきた？

全員 善太

中川 善太の話を考えてもらおうよ。今日は。善太君はどこへいたんだっけ？最初にいたのはどこかな？

C / 松の木

中川 どんな松の木だっけ？

C / 太い。

さそこ でかい。

中川 この松はどこにあったんだろう。

たくみ たんぼ

中川 たんぼのどのあたりかな？…真ん中らへんかな？…ちよっとおばさんにリピートしてもらおうね。

小林 *リピート

全員 かたすみ

中川 かたすみ、すみっこの方だね。これはどんな場所かな？どんな感じのところだ

ろう？…リピートしてもらおう。

*リピート

☆二時一〇分☆

中川 どう？

C / 神秘的

中川 神秘的ってわかるかな？

すごいね、みんな一回聞いただけでちゃんと思い出せたね。

じゃあ次、大丈夫かな？ 善太は何か聞いていたような気がするんだけど何を聞いていたのかな？

さそこ 鳥の声

中川 鳥の声を聞いた。他にないかな？他の人もいいかな？僕はこういう声っていうのもかまわないよ。…じゃあ鳥の声でいいね。また思いついたら言ってね。

善太は何をしていたかな？

石をぶつけた

C / 石をぶつけた

中川 石をぶつけた。何にしたのかな？何

で？ …何でぶつけたんだろうな？…ちよっとリピートしてみよう。

小林 *リピート

中川 何でぶつけたんだろう？ 何でもいいんだよ。多分こんなことじゃないかなって…ちよっとね、先生にもよくわかんないんだ。だからみんなに助けてもらいたいんだ。何でかな？ さとこちゃん、どうかな？

さそこ 石をぶつけたらこわくないやと言って

も何も聞こえなかったから、石ぶつけたら何か言うかなと思っただ。

ああ、そうかあ。石をぶつけたら何か言うかなと思っただのね。

小林 いろんな石のぶつけかたがあると思うの。(2つのパターンを実演) どう？

C / こわい。

小林 こわい。びくついてる？

小林 おびえている。

たくみ 野球のカーブとか…

小林 そんな余裕ないんだよね、カーブとか何とかがっていう。

中川 そうよね。何かムチャクチャになってるよね、投げ方。

鳥どうしちゃったの？ 死んじゃった

中川

小林

たくみ

中川

小林

たくみ

中川

の?…死んでないんだよね。どうして殺さなかったの?

神様の鳥かもしれない

神様の鳥かもしれない。だからどうなの? 殺しちゃったら?

崇られちゃう

崇られちゃう! 怖いね。

かなちゃん何?

偉い鳥かもしれない。

でもメチャクチャ投げているからまぐれあたりで死んじゃったかもしれないね。

怖いもんね。

すごいね、こんなに出てきた。一回読んだきりだよ。

善太の話を誰が聞いたんだっけ?

三平

三平から聞いたんだね。善太の話ってどんな話だったかな? ワッハッハって笑う感じ?…三平は感心して聞いていたね。ここに出ている言葉だと怖かった、崇られるんじゃないか、そういうちよつと変な感じの話だったかな。

☆二時二〇分☆

今度は三平の話です。今度は少しづつ先を考えてもらいます。今まではゼーンぶ読んでもらってみんなに考えてもらったけど今度は少しづつ少しづつ読んでいくからね。

善太はあんなやつだったけど、三平はちよつと違うかも。三平はどんなやつでしょう。 (本文2)

さあ三平の話は続くんだけどまだ途中だよ。三平君はどこにいたのかな?…三平君はどこへ行ってきたの?

高い松のほこら

ちよつと善太をリピートするね (石をぶつけるシーン) 次は三平ね (ほこらを見るシーン)

どんな感じのする場所かな?…

じゃあちよつと善太君をみてみよう。田んぼのかたすみの太いでつかい松の木、三平君は高い木の松のほこら:あれあれ、三平と善太の

場所が同じ

同じだね。わかった? (聞かれたさとこ、首をかしげる) 同じ場所だったんだ

よ。ほこらって書いていないけど。

さつき善太は何ばっか見てた?

鳥

鳥はどこにいたんだろう?

木の上

じゃあ三平はどこを見た?

下

高い松の木の下の下を見ているんだね。

(場所の雰囲気の確認を板書をもとに行う) こっち (善太) は?

神秘的

じゃあこつちも

神秘的

…じゃあちよつとそのあとを読んでもらおう。(本文3) ☆二時三〇分☆何かあるかもしれないぞと思って三平は何をしたのかな?

じゃあ今までやったことリピートしてみるよ (三平がほこらを見るシーン)

中川 さあ、三平は何をしたんだろう。これ
はもう自由でいいんだよ。

★こちらへんから男の子同士、女の子同
士が盛んにヒソヒソ耳打ちを始める

さここ ほこらの中を見ちゃった

中川 ほこらの中を見た！

たくみ もしもほこらを蹴ったら：

中川 蹴った！

さここ 崩しちゃった

たくみ 崩した方が大変だ

中川 崩した人、誰？大変だって言ってるよ。
まだあるかな？他にない？ じゃあま
た思いついたら言ってみてね。(本文4)

耳を澄ませたら何が聞こえてきたのか
な？…聞こえたっていつでもみんなは聞
こえないと思ってるかもしれないね。
それでもいいのよ。

小林 でも聞こえちゃったのよ。何だってい
んだよ。

たくみ 鳥の声

中川 鳥の声が聞こえてきた。何て言っ
た？ 鳥は？……

さつきは「怖くない？」だったんだよ
ね。これは善ちゃん聞いたんだ。

★子ども同士ささきあっていてもなか
な意見として言ってくれない状態が続
いている。

佐藤 たくみ君、何って言ってるの？

中川 思いついてるな？

小林 鳥じゃなかったら何かな？

さここ 言ったらやばいことになるよ。笑うよ。

小林 いいじゃない。今日は思ったことを言
うんだから。

さここ 宇宙人の声

中川 宇宙人の声が聞こえてくる！

かなえ 人の声

たくみ 神様の声

さここ セミの声

★かなえさんがヒソヒソ。何とか聞き出
そうとするがヒソヒソ。やがてなおきに
「言っていない？」とささきやく。なおきに「い
いよ」と言われてやっと教師に耳打ちす
る

かなえ 死んだ人の声(震える雰囲気で板書)

さここ 動物の声

かなえ ネコの声

中川 いろんな声が聞こえてきたね。

小林 みんなの世界に行ってたから本当の三
平に戻します。(本文5)

中川 何を思ったんだろうね。

(先ほどの発言を振り返って)でもみんな
もだいたいいいじゃない。三平君より
ずっと何かちよつとおかしげだよ。
三平は何を思ったんだろうね。

さここ なんじゃこりゃ ☆二時四〇分☆

中川 なんじゃこりゃ！ そんなこと思いも
つかなかったな。

かなえ 地味な声

中川 他にないかな？

小林	リピートしようか？
中川	いや、リピートいいよ。じゃあそここのところ、思った事を抜かしてその後を読んでもらおう。(本文6)
中川	なんじゃこりや、地味な声、他に何かないかな？
たくみ	何でこおろぎがそんなところにいるの、って言っている三平の心は何なの？何じゃ？ このこおろぎ、って思ったんだと思うよ、たくみ君は。何でこんなところにこおろぎがいるの、って。
中川	★なおき君がたくみ君に耳打ち。たくみ君は座席から移動しながらかなえさんへ。かなえさんはさとこさんへ。
中川	声に出して言っつよ。
佐藤	じゃあさとこさん。(さとこ首を振る)
中川	じゃあみんなで言っつて、いっせーのーせ！
全員	(声をそろえて) こおろぎが本当の神様だー

中川	すごいなー「本当の神様だ！」これ様っていう字だよ。先生も字が乱れてきちゃった。みんながすごいから。みんな声をそろえて言っつたからみんなそう思っっちゃったんだ。
小林	ねえ、ちよつと提案していいかな？あの、善太と三平のお話してただけど、それよかみんなの考えを聞いていた方がよっぽど面白いから、ちよつと聞きたいな。何かこの辺のね。
中川	もうこれは出ちゃってるよ。こおろぎが本当の神様だ、なんてみんな言っっちゃってるんだから。
中川	何かこんな風なところ(神秘な板書のキーワードを次々と示しながら)何か神様の声、っていう風に思わせるような場所があるんじゃないの？このあたり。
中川	★キーワードを示しながら話している時、盛んに子ども達は笑う
中川	ある
中川	ある！ 教えてー。絶対それお土産にもつてかえる、それ。
中川	前ね、さとこさんの家のとこの橋の近くで台風で(チャイムで聞き取れず)「たすけてー」っていう声が聞こえた。

小林	この前の大水で流されちゃった所？
小林	うん。
小林	聞こえちゃったんだ。さとちゃんは何も聞かなかったの？
中川	他にないかな？
佐藤	★さとこさんが口火を切っつて子ども達が観音様の話を始める。
佐藤	写真あるよ。
佐藤	★笑顔ではあるがいろんな話を言っつたそうで言っつていくと雰囲気。
佐藤	怖くなっつてきた？
中川	(いいにくそうな女子に)じゃあ、一緒に言っつおう。いっせーのーせ
中川	ちびるなよ！
かなえ	★あいかわらずヒソヒソばかり。やがて観音様のわきにビニールハウスがあっつて、そここのところになんか顔が置っつてあるの。
この子	「マネキン」「生首」

小林 生首が置いてあるの？

たくみ 生首っていかマネキン

C I 今日、学校行くときすごいよ、たくみ君がそれを蹴っ飛ばしたの

小林 首を？

C I うん。むかついでたんだって。(暴露されている間、たくみ君はちよつとうつぶきかげん)

中川 たくみ君が蹴飛ばした。これはみんな怖いぞ。

小林 ★女子ささやきあい

小林 じゃあ今度はさところちゃんが言つてよ。

さところ いつも散歩してるところの上に竹藪があつて

かなえ 竹藪のところは昔戦争で負けた人の骨が埋めてある。

小林 いつごろの戦争？

かなえ ……。でその竹藪で止まると武士が追いかけてくる。

小林 武士。ああそんな前の戦争なの。

中川 もっとありそうだね。でも先生達東京に帰ってしまうから、また佐藤先生と勉強した時絵を描いたり文章で書いてくれないから、このような近くであること、そんな善太と三平よりもつとすごいぞつていうようなのを教えて。不思議だなつて思うところも一杯あると思う。みんなは今いっぱい教えてくれたけれども東京の子なんて全然だめよ。わかんないのよ、そういうのが。だけどみんなはわかる。

小林 さつきから佐藤先生がモジモジモジモジ、佐藤先生もここの土地の人だから。

中川 佐藤先生も何か言いたみたいだから佐藤先生にも何か言わせてあげようか。

佐藤 (写真を示しながら) はい、じゃあこれ、観音様のとたり

子ども 知ってる！(と口々に言葉が入り乱れる)「カミナリ様」「カミナリ様じゃないよ！雷神つて言うんだよ」等

佐藤 じゃあこれは知っていますか？

さところ ああ！ あそこ！ あそこ！

かなえ うちの近く。本家のわき。

佐藤 かなえさんのお店の名前は何ていうの？

かなえ 大杉商店。

小林 何か知ってるの？

かなえ 馬の墓がある。

たくみ 昔、大杉の木があつた。

小林 大杉の木があつたの？

たくみ でもカミナリで燃やされた。

佐藤 じゃあこれ。(さところさんの祠画像)

さところ (慌てて佐藤先生に手を伸ばしながら) もう！ それは出さないで。

中川 ちよつとさところちゃん。これ何？

さところ 出さないでよ。(盛んに照れる)

中川 これ何ていうか知ってる？ おうち？

男子 ほこら

さところ でっかいよ。(男子に) でっかいよね。さつちゃんの背よりでっかい。

中川 この後ろなに？

さとこ 竹藪。あつ、竹じゃなくて…

杉やぶ

中川 そうだよ、これ（善太と三平）は松だけど、似てない？ 似てるじゃない。まんまじゃない。で勝ってるじゃない。でかいよ。こんなすばらしいものがね…このまわりだよ。

で、先生思いました。みんながこんなに言えるのはやっぱりこういうものがみんなのそばにあつて、みんな一緒に暮らしているからかなつて。

と、いうことでした。今日はね、先生、とても楽しかった。もうこんな時間になっちゃった。もっと一杯聞かせてもらいたいから、このあと佐藤先生と勉強して一杯東京の子に教えてください。先生のクラスは3年生なんだけど、きつとすごい喜ぶかも。お土産どうもありがとう。

じゃあこの次の時間はこの続きをやつて先生達に一杯知らせてください。じゃあ今日のお勉強はこれで終わりにします。

かなえ 起立。気をつけ。これで5時間目の国語の勉強を終わりにします。ありがとう。ございました。

中川 ありがとう。

中川 はい、お土産話、千八百円でございます

さとこ 一億、一億、一億

中川 あーら、それは少し値切ってもらわなくちゃ。

お土産は骸骨…

★記念写真を撮る

★余韻の残る子ども達、その後もいろいろと話してくれている

☆おまけ
1

宮田 (ビデオカメラを向けて)ここにしゃべってもいいんだよ。さあ祠の秘密を話してごらん。(抱き合ったまま笑っているが話さない。やがて)

さとこ (かなえさんに)じゃあ最初に言っている？ うちの屋号がダイデンバだから祠は昔っから建ってるの。

宮田 何で建ってるの？

さとこ うーん……

宮田 じゃあ、何で壊さないの？

かなえ 神様だもんね

さとこ	うん、神様
宮田	じゃあこれからも大事にしていくのかな？
二人	うん。じゃないと…(ここで写真の準備ができて中断。撮影後再び)
宮田	大きくなつたらお母さんになるでしょ。もし自分の子どもがああ祠は古いから壊したいって言ったらどうする？
かなえ	壊さない！
さとこ	「お母さんの子どもの頃から残っているんだから記念物として残さない！」って言う。

※教師は実名を漢字で表記し、児童は仮名をひらがなで表紙した